

# ナラティブ研究と「日常的な民俗誌実践」

—日本の旧産炭地筑豊における遺産と記憶<sup>1</sup>

川松あかり

KAWAMATSU Akari

## 1. はじめに

民俗学／文化人類学にとって、フィールドワークを行いインタビューをするという行為は、研究／調査の最も基礎的な部分であると同時に、この学問領域における認識論上の本質的な部分でもある。ドイツ民俗学の歴史や教育プログラムに関して日本人がまとめた論文を通して〔森 2009、及川 2014〕、日本においても、戦後のドイツ民俗学が社会学的方法や文化人類学による民俗誌的<sup>2</sup>な方法を取り入れながら、その方法論と認識論を精緻なものとしてきたことを知ることができる。

ところで、筆者は調査地において、しばしば「現地の人たちこそが民俗学を実践しているのだ」という印象を抱くことがある。これは、当初漠然と感じられた印象に過ぎなかったが、日を追うごとにますます確信を持って感じられるようになってきた。

これに関して有益な視点を与えてくれたのが、ブリギッタ・シュミット＝ラウバーの民俗学の方法論に関する議論である。彼女は、フィールドワークとインタビューについて論じる中で、インタビューを民俗誌的实践に埋め込まれたものとしてとらえる。そして、民俗誌的实践に必ずともなう再帰性、開放性、プロセス性を強調しながら、このような性質を持つインタビューを「民俗誌的インタビュー」と呼ぶと述べる〔Schmidt-Lauber 2012 : 567-568〕。

このことを考えると、筆者が調査地において出会った人々は、まさに「民俗誌的インタビュー」の実践者であったように思われる。彼らは、フィールドワークをし、地域の歴史やそれに関わる人に出会い、その話を聞く。そして、現在の自分たちの意識について反省し、これらの実践はしばしば彼らの生き方を変化させてしまうのである。こうした、調査地において一般の人々が、しばしばライフワークとして営んでいる実践を総称して、以下本論では、「日常的な民俗誌実践」と呼ぶことにする。

以上の問題意識のもとに、本発表では以下の二組の問いについて論じていく。(1) 当該地域におけるこれら様々な「日常的な民俗誌実践」はどのような社会背景の中で生じてきたのだろうか。そしてそれらは、どのような目的を持ち、どのようなインタビューやフィールドワークを生み出しているのだろうか。また、この中で創り出される語りの型とはどのようなものなのだろうか。(2) 東京から一人の大学院生として地域に入っていき筆者自身は、いかに現地の人々の「日常的な民俗誌実践」の中に組み込まれながら、新たなインタビューの場を現出させているのだろうか。本論では、特に2000年代後半から調査地において生じた世界遺産登録運動の過程に焦点を当てなが

らこの二つの課題に取り組む。以上の課題を通して、地域住民による「日常的な民俗誌実践」を踏まえながら、過去の出来事の記憶を継承することに対する現代的な要請の中で、民俗学者が果たし得る役割についても考えていきたい。

## 2. 調査地概要：筑豊で炭鉱をめぐる語りを集めることの意味

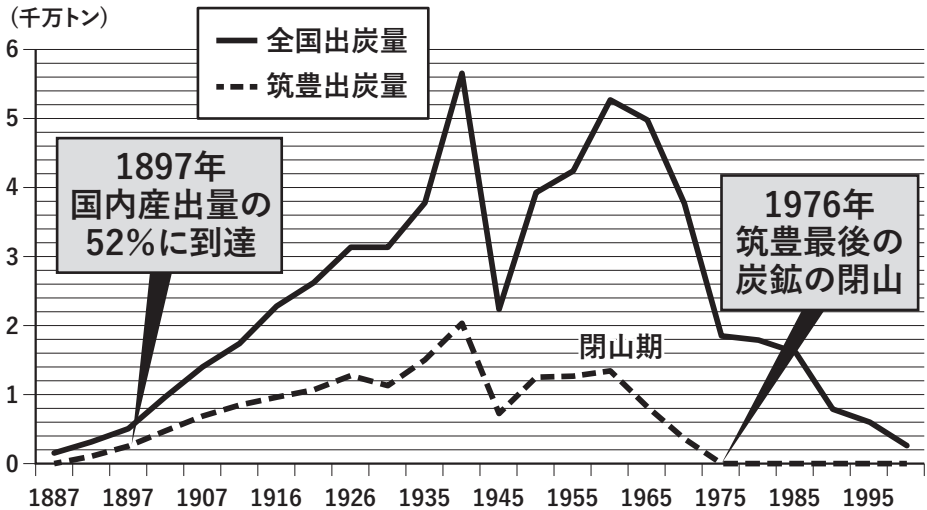
### 2.1 筑豊地域と炭鉱

九州地方は、日本の西南部に位置する主要な島の一つである。筆者の調査地である筑豊は、この九州地方の北部、福岡県に位置する旧産炭地である。2016年7月現在の人口は、41万3427人である〔福岡県企画・地域振興部調査統計課 online：「人口移動調査 第1表 平成28年（2016）」〕。筆者は、筑豊地域において今日炭鉱の歴史が誰によっていかに語られるのかを、オーラリティ研究・ナラティブ研究の観点から調査している。2016年4月からは、約1年間の計画で長期フィールド調査を実施している。なお、調査地には2013年から数回にわたり訪問しており、短期的なフィールド調査も実施している。

「筑豊」は、日本の近代化がちょうど始まったばかりの時期に福岡県北部の石炭産出地を指して用いられるようになった地域名称である。本地域から全ての炭鉱がなくなって40年が経つ現在は、実際の筑豊炭田よりもやや狭い地域を指す行政区分として「筑豊」の名前が残っているが、その地域名称の成り立ちを考えれば、「筑豊」と「炭鉱」は、切っても切り離せない密接な関係にあるといえる。ドイツ民俗学において意識分析としての語り研究を展開してきたアルブレヒト・レーマンは、民俗学において今日語りを研究する際には、「行動し、体験する人びとをその中心に位置づける」といい、意識分析においては、「それらの人びとの現在を問い、さらには、彼ら個人の歴史、彼らの環境の歴史、そして、大きな歴史がどのように一個人に経験され理解されたかを問うていく」ため、特に自伝的テキストを重視するという〔レーマン 2010：33〕。レーマンはこの意識分析の実例として「森」に関する経験談や思い出話などを収集し、ドイツにとって象徴的な存在である森をめぐるドイツ国民の意識を描き出した〔レーマン 2005〕。このようなプロジェクトを、もし、筑豊という狭い範囲内で実施するならば、私たちが選択すべきシンボルは間違いなく「炭鉱」である。ところが、炭鉱にまつわる自伝的な語りを集めることは、必ずしも容易ではないように思われた。この筑豊炭鉱をめぐる歴史的背景を明らかにするために、以下、筑豊と炭鉱の関係史を概観する<sup>3</sup>。

遠賀川という巨大な川に支えられた筑豊は、古代から農村地帯として発展してきた。ここが本格的な近代石炭産出地となったのは、日本の近代化が始まった明治維新以降である。土着資本や中央資本の石炭産業への進出が進んだ筑豊では、1897年には石炭産出量が全国出炭量の50パーセントを超えた（表1参照）。日本の産業革命に重要な役割を果たした官営八幡製鉄所も、筑豊炭田に近いことを一つの条件に現在の位置に設置され、1901年に操業を開始した。第二次世界大戦中には炭鉱は「戦場」にも例えられ、日本が植民地化した朝鮮半島の人々や女性、連合軍の捕虜も動員して石炭産出が続けられた。日本の敗戦直後は、連合国総司令部（GHQ）によって日本の立て直しのために石炭優遇政策がとられ、戦地からの引揚げ者や戦争で仕事を奪われた人々がどっと炭鉱に押し寄せた。ところが、1949年に戦後の石炭統制が解除され、朝鮮戦争による好景気が後退すると、炭鉱は深刻な不景気に陥る。国は、安価な国外炭や石油の輸入へとエネルギー政策を切り替え、炭鉱は次々に閉鎖されていった。こうして、1976年に筑豊最後の石炭採掘が終わるまで、わずか100年ほどの間に、筑豊は石炭産業によって目覚ましく発展し、また没落したのである。

表1 日本の石炭生産の変遷(〔國友2009: 5〕、〔長弘2012: 78〕を参考に筆者作成)



1950年代末頃からは、筑豊の石炭不況と失業・貧困が、マスメディアを通して日本全国を賑わす社会問題となった。大きなきっかけとなったのは、1959年に福岡県の婦人団体が「黒い羽根運動」と称して始めた募金活動である。これがマスコミによって報道されると、筑豊の閉山地帯は突如大きな注目を集めることとなった。1960年には、相次ぐ炭鉱の閉山にあえぐ筑豊のイメージを刻印する2冊の象徴的な本が出版された。写真家土門拳による写真集『筑豊のこどもたち』と、記録文学作家上野英信によるドキュメント『追われゆく坑夫たち』である。上野氏の縁者は筆者に、この2作品が「筑豊」のイメージを暗くしたという批判を受けることがしばしばあるのだと語った。この年には、筑豊地域の子どもたちのための社会奉仕団体「学生キャラバン」も始動している〔筑豊石炭産業史年表編集委員会編 1973: 575〕。筑豊は、戦後の本格的な復興期に入り高度経済成長を遂げていく日本の中で置き去りにされた「文明の中の僻地」〔永末 1973: 227〕としての不名誉な地位を確立していったのであった。

その後も筑豊のイメージは払しょくされなかった。炭鉱閉山後の筑豊には、国から多くの補助金が支出され、住民たちによれば、それは一面では失業者に働き口を与えたが、他面では補助金争奪合戦のようなものを生み出し、暴力団などが幅をきかせたという。鉱害による地盤沈下も深刻であった。1969年から連載の始まった、人気作家五木寛之による『青春の門』も、何度も映画化・ドラマ化されながら、筑豊のステレオタイプを日本中に広めることに貢献した。この小説においては、暴力と差別・貧困の渦巻く筑豊と、思春期の少年の鬱屈した心情が重ね合わせられてドラマ化された。

以上のような歴史の流れを辿り、炭鉱は今日にまで及ぶ地域の負のイメージの象徴となってしまったのである。炭鉱は筑豊地域と切っても切り離せない存在であるにもかかわらず（これをある石炭記念館の館長は「筑豊には炭鉱のDNAがある」と繰り返し表現している）、長年多くの住民は筑豊の出身であるということを表向き隠したりし、炭鉱の歴史にかかわることは語りたがらなかったという。筆者の調査中にも、あちこちでこのような話を聞くことがある。出身地を尋ねられた時に「福岡です」と言っておまかすという話は、最早住民が地域と自己の関係について語る際の一つの語りの型となっている。また、筆者が炭鉱を調べていると自己紹介しただけで、「私

は炭鉱は好きじゃない」と顔をしかめた郷土研究者もいた。

したがって、炭鉱についての語りを収集するという作業は、筑豊においてそう簡単なことではないはずである。にもかかわらず、筆者は往々にして、むしろ歓迎を持って地域住民から迎えられた。何人もの高齢者が、眼を輝かせながら次々に炭鉱と関係する自分自身の経験を語ってくれたこともある。なぜ筑豊において炭鉱についての語りを収集するという研究テーマが、今可能になっているのだろうか。これは、2000年代後半以降の、極めて現代的な当該地域の社会状況を反映していると考えられる。

しばしば、このような炭鉱についてのまなざしや語り方の変化の直接的な原因として地域住民に認識されているのが、世界遺産をめぐるこの地域での動きである。そこで、次に筑豊周辺における世界遺産登録運動の経過について概観していきたい。

## 2.2 世界遺産登録運動と炭鉱へのまなざしの変容

2015年、「明治日本の産業革命遺産：製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に記載された。この遺産群は、産業の近代化というテーマのもとに各地に散らばる複数の資産を関連付けるリアルノミネーションという形態をとった点〔木村 2014：218〕、また、推薦書作成に至る調査の段階から複数の海外専門家が深く関わっていた点〔山本作兵衛氏の炭坑の記録画並びに記録文書の保存・活用等検討委員会他 2012：3〕が特徴的であったという。こうした外部からの新しいまなざしが筑豊にも様々に注がれ、この遺産群の世界遺産登録運動の過程は、筑豊地域内における炭鉱へのまなざしにも影響を与えることとなった。

産業遺産に関する書籍の著者である社会学者木村至聖の議論に従えば、そもそも、日本で炭鉱のような近代以降につくられた施設が「遺産」という概念でとらえられるようになったのは、1980年代ごろからであると理解できる。1990年には、文化庁が「近代化遺産」という概念を創り出し、全国調査を始めた。1996年には、文化財保護法の改正により、近代建築物を文化財として登録することができる制度が整う。さらに、2007・2008年に、経済産業省は「近代化産業遺産群」というリストを、33のストーリーとして公表した。一方「近代化遺産」や「産業遺産」への関心は、中央行政によってのみつくられたものではなく、一部では1980年代からまちづくり・まちおこしの資源としても注目されてきたという〔木村 2014：3-4〕。

筑豊にとって、こうした近代の痕跡を「遺産」とみなす動きは、まずその周辺地域で始まったものであった。2006年、九州・山口地方の6県8市が共同で、世界遺産登録のための13の遺跡を挙げた候補リストを決定し、「九州・山口の近代化産業遺産群」として文化庁に提案した〔木村 2014：218-219、安藤 2010a：1〕。これに対して反応を示したのが、かつて筑豊炭田の主要都市の一つであった田川市である。田川市には、三井鉱山が進出し、1964年まで堅坑によって大規模な石炭採掘を行っていた。三井田川鉱業所の跡地は現在「石炭記念公園」として整備され、田川市石炭・歴史博物館が設置されている。以下、田川市石炭・歴史博物館館長の安藤龍生による記述〔安藤 2010a、2010b、2012〕をもとに、世界遺産登録に関する田川市の取り組みの経過を見ていきたい<sup>4</sup>。

石炭記念公園内には、2本の煙突と堅坑槽<sup>やぐら</sup>が残り、6県8市の共同提案書にも、これらを類例として検討すべきであると記述されていた。ちょうどこの年に、田川市石炭・歴史博物館の館長に就任した安藤は、この箇所を見て、この遺産群に含まれる八幡製鉄所は筑豊の石炭を獲得できるという条件の下で現在の位置に建てられた経緯があることから、筑豊の2本の煙突と堅坑槽こそ候補とされるのが当然と判断し、共同提案された遺産群に田川市の資産を追加してもらうための

活動を始めた。まず、共同提案から約一カ月後に、「世界遺産登録をめざして！ 竪坑櫓と大煙突を後世に伝える会」と題した緊急住民決起集会を開催。200人の住民が集まった。その後、6県8市の共同提案書が文化庁から「継続審議」という評価を受けたことにより、田川市もオブザーバーとして会議に参加し、この取り組みに加わるようになった。2008年には「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会が発足し、この協議会の下に専門家委員会が設置された。

登録に向けた取り組みの過程では、地元の青年会議所が竪坑櫓をライトアップするためのLEDライトを寄贈するなど、市民レベルでの関心も高まり、支援の動きも生まれたという。また、市内に位置する福岡県立大学は、「世界遺産を目指す旧産炭地田川再生事業～産・官・民・学～」というプロジェクトを展開し、この取り組みの一環として、様々な専門家も招いた「世界遺産田川国際シンポジウム」も開催された。海外専門家委員は数回にわたり田川地区の40カ所に上る炭鉱関連の遺産を視察した。こうして2009年、九州・山口の近代化産業遺産群が再度提案され、世界遺産候補の国内暫定リストに記載されるにあたり、田川市の二つの資産もリスト入りを果たしたのである。

ところが、その後文化庁からいくつかの課題が示され、2009年10月に行われた専門家委員会において、田川市の資産は世界遺産の構成資産から除外され、関連資産へと格下げされることになった。この要因は、筑豊における炭鉱関連の資産の残りがあまりに部分的で、拡散しているということにあった。一方で安蘊は、提言書の中でも筑豊炭田の歴史的重要性が重視されたと述べる。特に、提言書には、次のように書かれていた。

20世紀の初頭、日本で最も大きな炭田に成長した筑豊炭田で、三井田川鉱山は顕著な位置しめている。伊田竪坑の遺構は1905～1910年に開削されたものだが、日本の三大竪坑(何れも筑豊)と称され、田川市石炭記念公園を見下ろす当時の竪坑櫓と赤レンガの二本煙突により構成される。これらの象徴的な二本煙突は、1910年伊田竪坑で生まれ、日本で最も愛されている民謡、炭坑節の中でも「あまり煙突が高いので、さぞやお月さん煙たかろ」と謡われ、永遠に語り継がれている。こうした無形文化遺産は大きな意味でコミュニティのアイデンティティやプライドの基盤になっている。山本作兵衛の炭鉱絵画は炭鉱のコミュニティの生活の全ての様相を描写する日本における炭鉱記録画の代表作である。同氏の特出したコレクションは現在田川市石炭・歴史博物館に保管され、ユネスコの世界の史料遺産 (Memory of the World) への申請が検討されている [安蘊 2010a : 3]。

と書かれていた。安蘊 [2012:2] によれば、この専門家委員会の席で複数の海外専門家委員から、山本作兵衛の絵と「世界の記憶」に関する発言があがったという。

「世界の記憶」(Memory of the World) とは、1992年にユネスコが始めた事業で、重要な記録遺産を保護し、これらへのアクセスを支援し、重要な記録遺産への世界的な認識を高めることを目的とするものである [エドモンドソン 2002]。現在の日本では、一般に「ユネスコ三大遺産事業」という言葉で世界遺産、世界無形文化遺産、そして「世界の記憶」が一体的な「世界遺産」のセットとしてとらえられている。2009年当時、日本から「世界の記憶」に記載された事例はなく、申請に向けた国内的な制度も整っていなかった。日本での認知度も皆無に等しかった。

山本作兵衛の炭鉱絵画とは、世界遺産登録への取り組みの過程で国内外の専門家が田川へ視察に来た際、たまたま田川市の美術館と博物館で開催されていた山本作兵衛画の展覧会を視察し、海外専門家に印象を与えたものだという [安蘊 2012 : 2]。上に引用した専門家委員会の提言書か

らもわかる通り、資産が少なく「近代化産業遺産群」の一員として世界文化遺産に登録することが厳しいと判断された筑豊の炭鉱は、それでもなおその歴史的重要性とコミュニティにおける価値の高さを評価された。そして、まるで文化遺産登録の代替策であるかのように、この構成資産から筑豊を除外する会議の場で、山本作兵衛の炭坑記録画の「世界の記憶」への登録という話が田川市に降ってきたのである。この時から、田川市の目標は世界遺産から「世界の記憶」へと切り替わった。こうして、田川市と福岡県立大学による共同提案という形で、2010年3月に山本作兵衛の炭坑記録画並びに記録文書697点がユネスコ「世界の記憶」に申請された。そして、2011年5月、ユネスコの審査を経て、「山本作兵衛コレクション」が「世界の記憶」に登録されたのである。さらに、山本作兵衛コレクションに遅れること4年、2015年に九州・山口の各地から申請運動が起こった近代化産業遺産群も、「明治日本の産業革命遺産：製鉄・製鋼、造船、石炭産業」という名称で世界遺産に登録されたのであった。

以上の世界遺産登録運動の過程は以下の4点において重要であったと考える。①筑豊炭鉱は、日本の近代化をめぐる歴史の物語において極めて重要な役割を占め、炭鉱はアイデンティティの基盤となっているということが、海外専門家によって地域に示されたこと。そのおかげで、②筑豊地域において、炭鉱が誇るべき「遺産」として注目されるようになったこと、③しかし、筑豊には目立った「遺産」が残っていないことが明らかになったこと、そして、④とはいえ、地域内には炭鉱の時代を物語る様々な「記憶」が存在していることが示されたこと、そして、これら炭鉱の「記憶」を守り、残すことの重要性が示されたことである。

筑豊の炭鉱にかかわりの深い二つの世界遺産が誕生したおかげで、地域住民にとっても自分自身や地域を炭鉱の歴史と結び付けて語ることへの抵抗感は、取り払われつつあるように思われる。さらに、2014年と2015年には、日本の代表的なテレビドラマシリーズであるNHK連続テレビ小説で、たて続けに筑豊の炭鉱が取り上げられた。これによって筑豊への観光客も増加し、炭鉱を語ることに對する抵抗感の払しょくに拍車をかけた。例えば、筑豊内のある博物館学芸員は筆者に、今まで皆炭鉱についてはしゃべらなかったのに、最近炭鉱が注目されるようになってから急にしゃべるようになったのだと言い、彼女自身のおじもその一人なのだと話した。

また、炭鉱時代を知ることへの市民の関心も高まりつつある。筑豊最後の炭鉱が閉山となったのは約40年前になるが、実際には1950年代から筑豊に存在した大小様々な炭鉱は次々と閉鎖していった。したがって、現在は筑豊においても炭鉱を直接知らない世代が大半となり、炭鉱の歴史を学ぼうとし始めたのである。筆者は、ここに市民による新たな「日常的な民俗誌実践」が生まれていると考える。

ここで、今日の炭鉱への関心の高まりの中で生まれた活動を二つ紹介する。まず、田川市石炭・歴史博物館館長の安蕨によって2008年度から2015年度まで開催されていた講座「炭坑(ヤマ)の語り部」である。これは、炭鉱で働いた経験を持つ人を講師として招いて、炭鉱に関する経験を聞き、記録するものである。この講座では、安蕨が聞き手となり、そのインタビューを参加者が見るような形になる。安蕨は、講座のために講師への事前インタビューも行っていたという。この講座は博物館館長である安蕨によって切り開かれたインタビューの場であったといえるだろう。そして、講座に参加する筆者を含めた聴衆は、このいわば「公開インタビュー」とでもいうべきものの観客として、ここで、自らもやはり、ある民俗誌的实践を行っていたと言えるだろう。

もう一つの実践は、筑豊各地において行われている「まち歩き」というイベントである。筆者も調査中いくつかのまち歩きに参加してきた。これらのまち歩きは二重の意味で民俗誌的な実践であるといえそうである。第一に、まち歩きを行う前に、ガイド役を務める市民自身が、現地を訪れ、

インタビューをしているという意味においてである。田川市のまち歩きでは、市民は一年間にわたり博物館でガイド養成講座を受講してからガイドを行った。ここで、ガイドたちはそれぞれの担当となるスポットに関して自分で調査を行い、説明の内容を考えていた。まち歩きの前に行われた会議での会話や、当日のガイドの話の聞いていると、ガイドたちの多くは自分の語る説明をつくるために現地に足を運び、インタビューも行っていることがわかるのだ。第二に、まち歩き当日の道中で会話をしながら、参加者のみならずガイド自身も地域の歴史について新たに学んでいるという意味においてである。例えば、先述の田川のまち歩きでは、「かつて炭鉱町であったこの町に映画館がたくさんあった」というガイドの解説を受けた後、一人の参加者がこの映画館に「子どもの頃行った記憶がある」と話し始め、「それはどこにあったのか」と、ガイドや参加者が一緒になってその人の経験談を聞くという場面が生じた。また、あるガイドは、まち歩きの途中で「ここに連合軍捕虜の収容所があった」という話を始め、同行中の博物館館長や訪問先で出会った市民に質問してその事実について確かめようとしていた。この時彼は、筆者に捕虜収容所について説明するガイドであると同時に、その歴史について調査するインタビュアーでもあった。

世界遺産登録への取り組みの過程で、筑豊の炭鉱の歴史的な重要性や、炭鉱に関する「記憶」を残すことの意義が強調された。これは、これまで炭鉱に負のイメージを抱いていた人や何の関心もなかった人をも含みこみながら、多くの人々を民俗誌実践に参入させる道を開いているように思われる。今日では、炭鉱の経験を語る側の障害が取り払われて、炭鉱に関する語りを聞き取りやすくなった。今もなお少数派ではあるが、炭鉱について聞きたい、知りたいという市民も増えた。この聞き手と語り手の関心が合致したところで、まち歩きのような市民の実践は成立するのである。そして、筆者の調査もまた、多くの場合地域住民が生み出してきたこれらの「日常的な民俗誌実践」の上に成立し、進展しているのである。

### 3. 消えゆく痕跡と多様な「日常的な民俗誌実践」

#### 3.1 炭坑絵師山本作兵衛誕生の背景：

##### 炭鉱閉山と生き方としての「日常的な民俗誌実践」の存在

山本作兵衛の炭坑記録画は、しばしば、目の前で消えゆく炭鉱の世界を驚くべき「記憶」力によって克明に「記録」したもとのとして評価される。山本作兵衛の絵を高く評価してきた芸術家菊畑茂久馬は、山本作兵衛が目の前にモデルを置くのではなく「人並み外れた抜群の記憶力」によってその絵を描いたことを指摘する [菊畑 1994 : 19-25]。これを受けて、福岡市博物館館長の有馬学は「作兵衛画の制作は、まさに描写する対象を失った瞬間から突如始まったのである」 [有馬 2014 : 16]とまとめている。

このような山本作兵衛画に対する評価の語り口は、筑豊の遺産が世界文化遺産の構成資産からは除外され、代わりに山本作兵衛の炭坑記録画が浮上して「世界の記憶」に登録されていったという過程と重なるものがある。世界遺産登録運動の過程でも、筑豊では炭鉱の遺跡の多くが既に失われていることが明らかにされた時、山本作兵衛の絵と文章が注目を集めたのだ。さらに、この炭鉱の存在を示す遺跡がないという認識は、筆者が調査中あちこちで耳にした「何もない」という地元住民の語りとも呼応する。

そこで、何か「なくなった」ことを伝える住民の語りを二つ紹介しよう。一つ目は、直方市の「坑夫の像」に関する物語である<sup>5</sup>。直方市は筑豊の主要都市の一つである。この像は、かつて直

方駅前であり、産炭地としての直方市のシンボルとなっていた。現在も駅の近くで喫茶店を営む女性は、坑夫の像を見ると直方に帰ってきたなと思ったものだ、と語る。ところが、1996年に、市は坑夫像の移転を計画。直方郷土研究会は直方市への反対運動を始めた。他にも複数の市民グループが移設に反対する運動を開始し、これらの運動は多くの市民の支持も得たものの、結局、市民が「誰も行かない」と口をそろえる河川敷の向こうへ像は追いやられ、新しいモニュメントが駅に設置された。今日、郷土研究会のメンバーや、地域の歴史やまちづくりに関心を持つ市民たちにとって、「坑夫の像」移転の顛末は特に熱い議論を呼ぶ話題となっている。それでも、ある時、郷土研究会の会長は仲間たちに対して、「今でこそみんな坑夫の像を移転してもつけないと言うが、当時私たちが運動している時はほとんど誰も関心さえなかったんだぞ」と語っていた。会長は、炭鉱について語る時、常に、炭鉱に対する市民のまなざしがかつていかに差別的なものであったかを強調する。炭鉱が多くの人にとって負のイメージを喚起するものでしかなかったころ、「坑夫の像」を地域のシンボルとして残そうとする市民の動きは行政を動かすほどの力は持ちえなかったのである。

むしろ、炭鉱の閉山期から続く地域の混乱と衰退のイメージから脱却するため、筑豊にあった炭鉱の痕跡は、これまで次々に消されてきた。第二の事例は、極めて頻繁に筑豊炭田の象徴的な風景として語られる三角形の山、「ボタ山」の物語である。石炭採掘の際には、石炭以外の岩石や質の悪い石炭も一緒に掘り出され、選炭後に捨てられる。これを筑豊では「ボタ」と言い、このボタ捨て場が山になったものが「ボタ山」と呼ばれる。直方市石炭記念館の館長は、来館者を案内する中で、このボタ山の歴史について語る。ボタ山が炭鉱閉山後、安く買われて建設用の石材とされ、山を削った跡地は工業団地として造成されていったという物語である。そして館長は、これらの結果「500余りあったボタ山がすべて消えました」という言葉で物語を締めくくる。この語り口も、目に見える炭鉱の痕跡が、産炭地のイメージからの脱却のためにいかに筑豊から消されてきたかを象徴的に表現している。しかもこの語り口は、ボタ山について多くの地元住民が語る物語とも共通している。

以上の二つの物語は、現在の住民の関心とは異なり、かつて筑豊の人々がいかに産炭地の痕跡を消滅させようとしてきたかを教えてくれる。しかし、多くの人々が炭鉱を消し去ろうとする中で、一方では直方郷土研究会の会員たちのように、それを残そうとし続けてきた人々がいたということもまた事実である。特に、それらの動きは炭鉱で働いた人たちの人生を記録していこうとする動きの中で顕著だったように思われる。これらの実践者は、かつての炭鉱労働者を訪ねて話を聞き、彼らの仕事道具や絵画、文章、そして、彼らが撮った写真を収集した。したがって、消えゆく炭鉱の「記憶」を「記録」しようとする試みは、決して一連の世界遺産登録運動や「山本作兵衛コレクション」によってのみ始められた訳ではない。むしろ、画家山本作兵衛も筑豊の「日常的な民俗誌実践」の中でこそ生まれたということが出来る。

山本作兵衛（以下「作兵衛」と表記）は、1892年に現在の筑豊に生まれた。7歳のころから坑内に下がっていたという。1906年、14歳で炭坑夫としての生活を始め、1955年に当時勤めていた炭鉱が閉山するまで約50年間、筑豊の炭鉱を転々として生きてきた。その後、1957年に、閉鎖した炭鉱の夜警職員として働く中で、日記の余白や広告紙の裏などに炭鉱の絵を描くようになったという。これが1961年に勤め先の鉱業所会長の目に留まり、この絵の出版計画が進められることとなった。そして、1963年に「明治・大正炭坑絵巻」として作兵衛のはじめての本が出版された。当時は、炭鉱が次々と閉山していく時期であった〔田川市石炭・歴史博物館・田川市美術館 2008、森本 2008、田川市 online：「山本作兵衛氏 炭坑の記録画」〕。



その後、作兵衛のもとには人々が集まるようになった。その中でも重要なのが、郷土史家であり田川市立図書館の館長でもあった永末<sup>としお</sup>十四雄である。永末は、1964年、田川郷土研究会において「炭鉱資料収集運動」を始めた。これに作兵衛も賛同し、新しい絵を描き始めた。安蘊は、作兵衛は炭鉱の終焉にともなう記録運動に共鳴したのだと筆者に語った。ずっと後に、この時に描かれた絵が「世界の記憶」の一部として登録されることになる。

また、筆者がここで「日常的な民俗誌実践」の観点から強調しておきたいのは、作兵衛のもとへも足しげく通ったとされる記録文学作家上野英信の存在である。作兵衛は上野の紹介によって1967年のNHKテレビに取り上げられた。上野は、学校に思うように通うこともできなかった作兵衛が晩年になってこれだけの記録を残したことそのものに心打たれていたというが〔上野2012：38〕、その上野の生き方は、まさに一生をかけた炭鉱労働者へのフィールドワークと言っても良いものである。彼は、家族と共に筑豊の小さな町鞍手町に移り住み、一生の間炭鉱労働者の姿を追い続けた。作兵衛は、そんな上野に酒を飲みながら語り、坑内労働歌を歌って聞かせた。

そして、上野の周辺には、彼と同じように人生をかけて「日常的な民俗誌実践」を行ってきた様々な人物を見出すことができる。例えば、女坑夫に対する聞き書きを行い本を書いた作家の森崎和江〔森崎 1970〕、地元住民として多くの女坑夫への聞き書きをライフワークとしてきた井手川泰子〔井手川 1984〕、筑豊の神社の息子として生まれ第二次世界大戦中の朝鮮人強制連行の歴史を追求してきた林えいだい（例えば、〔林 1981〕）、永末や安蘊に代表される多くの郷土史家や、生徒に地域の歴史を教えようとしてきた学校教員などである。こうした人々にとって、炭鉱の痕跡の消えゆく中で筑豊の地を歩き、炭鉱時代の記憶を持つ人々の話を聞くことは最早人生において欠くことのできない重要な営みであった。1970年代からかつて炭鉱で働いた女坑夫たちに聞き書きを続けてきた井手川は、その著書の冒頭、一人の女坑夫の死について言及しながらこう述べている。「女坑夫は確実に消えて行く。筑豊の一つの終焉を感じさせたタカさんの死に教えられたことは多い。彼女にとって筑豊とは何だったのか、その答えを求めて私は歩き続けようと思う」〔井手川 1984：10〕。ここには、女坑夫たちの語りを求めて歩き続けるという井手川の実践が示されている。それは、彼女の生き方そのものである。筑豊には、今日「遺産」として定められ得る遺跡の他にも、多くの人々の炭鉱での労働や生活、女性の坑内労働や朝鮮人の強制労働、そして閉山とその後の混乱などの様々な「記憶」がある。そして、実際に筑豊を歩き、人の話を聞くことによってそれを「記録」しようとしてきた多くの人々の「日常的な民俗誌実践」が、この地には根付いているのである。作兵衛は、その民俗誌的实践の中で見出された特筆すべき人物の一人であり、また、主体的に実践に参画した実践者でもあったといえるだろう。筑豊にはこうした「日常的な民俗誌実践」によって見出された人材が作兵衛の他にも数多く存在する。例えば、上述の「炭鉱資料収集運動」に賛同したもう一人の重要な人物として、元炭鉱労働者であり写真家の橋本正勝がいる〔田川郷土研究会 1965：53〕。橋本は、ボタ山の写真50枚をこの運動のために寄贈した。橋本は、現在も自身の写真を用いながら炭鉱を語り継ぐ活動を行っている。

以上、山本作兵衛と閉山期以降ずっと存在してきた「日常的な民俗誌実践」の関係について説明してきた。筆者の調査も、この地域において、消えゆく炭鉱の「記憶」を「記録」しようとする実践の一つとして受け止められることが多い。そして、筆者の調査は、筑豊にいる人々の「日常的な民俗誌実践」と、世界遺産登録運動によって最近ますます高まってきている炭鉱の「記憶」を「記録」することへの関心、そして、炭鉱をめぐる現在の地域住民の意識の様々な位相をとらえたい筆者自身の関心の接点において、実現しているといえる。

### 3.2 ナラティブ研究を支える「日常的な民俗誌実践」： ドキュメント番組撮影現場を調査フィールドとして

そこで、筑豊に存在する多様な「日常的な民俗誌の実践」と筆者自身の関心との絡み合いの中でインタビューの場が生まれた事例として、以下では一つのテレビ番組を紹介したい。それは、NHKのBSチャンネルにおいて放送されたある紀行ドキュメント番組である。この番組は2016年6月24日の夜9時からと、7月1日の朝8時から放送された、約1時間の番組である。この番組において筆者の調査が放送されることとなった。

この番組は、毎回日本国内の特定の地域をテーマとして、その風土や祭り、人々の暮らしや営みを描く紀行ドキュメント番組シリーズであり、いくつかの短い物語がオムニバス形式で構成されている。発表者が長期調査を始めた時、ちょうど「筑豊」をテーマとした番組の撮影が行われていた。出来上がった番組は9つの物語によって構成され、その5番目の物語として約9分間、筆者の調査をめぐる物語として制作された。結果としてできた物語は、番組制作者、地域の人々、そして調査者である筆者自身の相互行為によって完成したものであった。

まず、この物語を構成する5つの場面について説明する。シーン1：炭鉱に詳しいYさんと大学院生（筆者）が炭鉱の坑口を見に行く場面、シーン2：この大学院生が東京から筑豊にフィールドワークのため引っ越してきたことを説明する場面、シーン3：彼女が炭鉱の経験を持つ一人の高齢男性の話聞きに行く場面、シーン4：彼女が炭鉱爆発事故で夫を亡くした女性を訪れる場面、そして、シーン5：大学院生がコメントを述べる場面の5場面である。このシーン1、3は、既存の「日常的な民俗誌実践」の後ろ盾の上に生まれた撮影現場であった。

シーン1は、筆者がYさんの案内で炭鉱の跡地を訪れる場面である。番組においてこの場面は、地元の人とYさんに同行してもらいながら、大学院生が山の中にかつての炭鉱の坑口の跡を見つけていくという映像を通して、かつて小さな坑での盗掘がいかに行われていたかを説明する場面として編集されている。この短い場面の裏に、Yさんの「日常的な民俗誌実践」の在り方を理解することができる。

Yさんは取材時の10年ほど前、28歳で心臓病を患い、一時仕事ができなくなった。この時、Yさんは図書館で地元に関する資料を読むようになる。特に彼は炭鉱に関する本を多く読み、そこは現在どうなっているのだろうかと思い始めた。そして、それを確かめるために一人で炭鉱の遺構探索を行うようになったのである。彼のフィールドワークとは、航空写真や昔の資料と現在の地図を重ねあわせながら、バイクでその炭鉱の跡を確かめに行くというものである。かなり険しい山や藪の中にも入っていく。フィールドワークの後には、その報告をブログにアップしている。当初はもっぱら遺構に興味があったというYさんだが、炭鉱探索を初めてしばらくした頃、かつて女坑夫だったという女性に会った。女性は、自分の夫が落盤事故で亡くなったがほとんど何の補償も受けられなかったと声を荒らげて話し、彼の手を強く握って振り回しながら、若い者にこんな理不尽な時代があったということ覚えておいてほしい、と言った。その時、Yさんは生きている限り自分が各地で見たもの、聞いたことを語り継いでいこうと決意したという。そして、2014年8月には、筆者に、今は話を聞くことの方が主たる活動になっていると話した。

シーン1からも、Yさんの「日常的な民俗誌実践」の在り方を様々に見出すことができる。番組で同行してくれた地元住民の内の一人も、Yさんが遺構探索を行う中で知り合った人である。取材で訪れた坑口の一つは、この住民の家の裏山にあったものだった。また、Yさんの活動は、近年新聞などのメディアでも紹介されて広く知られるようになり、活動の幅が広がった。2016年には地元の小学校でゲストティーチャーとして炭鉱の跡地をめぐる授業を始めたほか、若手教員の研

修で地元の炭鉱跡地を案内しながら、自らがこれまで聞いてきた話を紹介するというものも行った。番組の焦点はYさんの実践自体にはないが、地元の人と世間話をしながら山道に分け入り、かつてあったはずの炭鉱跡を確認していく、そしてそれを他の人々に語り継ぐというYさんの「日常的な民俗誌実践」がこの場面を支えていた。筆者が坑口を発見するというこの場面は、実際にはYさんの「日常的な民俗誌実践」によって生まれたものなのである。

シーン3もいくつかの「日常的な民俗誌実践」によって生まれたものである。ここは、日本が朝鮮半島を植民地としていた時代に日本に渡ってきた在日コリアンの2世であり、自宅のすぐ裏につくられた松岩菩提という供養塔に納骨された遺骨の遺族であるTさんに関する場面である。インタビューにおいて、筆者はTさんに自身と松岩菩提供養塔との関係について話を聞いた。彼はまた、在日コリアンに対する差別について、そして、多くの人に自身の経験談を語るという彼の実践についても話してくれた。

Tさんへのインタビューの背後にある「日常的な民俗誌実践」は「強制連行を考える会」という市民の活動である。会の事務局長であり創始者の一人でもある男性は、「強制連行を考える会」の歴史について筆者に以下のように語った。この会の発端は、1984年に「『筑豊』から日本人と在日韓国・朝鮮人の歴史を訪ねる会」というフィールドワークを行ったことに遡る。この際の訪問先に、炭鉱事故で亡くなった朝鮮人と日本人の供養塔があり、供養塔を守る市民と出会った。これがきっかけになり、1985年に「強制連行を考える会」が結成された。この会では、いくつかの供養塔での強制連行犠牲者の供養や、日本に残る韓国・朝鮮人の遺骨を故郷に返還するための調査活動を続けている。また、朝鮮半島から強制連行された人々と日本人の関係の歴史を学ぶことも続けており、この会が年に1回欠かさず行ってきた活動が筑豊でのフィールドワークである。事務局長にとって最も重要でありまた興奮を覚える実践は、新しい人に出会い初めてインタビューをするフィールドワークの事前調査であるという。1992年、このフィールドワークの下見の際に、会員たちはある炭鉱の共同墓地が、ゴルフ場建設のために破壊されているのを見つけた。この墓地には、日本人のみならず韓国・朝鮮人も埋葬されていた。彼らは地元住民と協力してここに供養塔を建てる運動を起こした。その際に出会ったのがTさんである。Tさんは、供養塔建設にも積極的に携わり、以降遺族として供養塔について語るようになった。多くのメディアや人権教育担当者がTさんにインタビューを行ってきた。1998年に発行された福岡県の人権教育副読本の中学生版には、Tさんをモデルとした「おじいちゃんの涙」という文章も掲載されている[同和教育副読本作成委員会 1998]。

Tさんは番組のためのインタビューでも、今も小学生や中学生の前で自身の体験を語っていて、講義に行くのに忙しいのだと話した。このシーンで、Tさんは、子どもの頃、炭鉱で亡くなった人々の火葬の手伝いをしたこと、日本人と朝鮮半島の人々の埋葬のされ方が違ったことなどの経験を語る。これは、Tさんがこれまで何度も繰り返し語ってきたことであると想像できる。実際、放映された場面の一部は、筆者のインタビュー時のものではなく、事前にNHKがTさん取材に行ったときのものであったが、その内容は筆者に対して話された語りと大筋において一致していた。Tさんへのインタビューは、「強制連行を考える会」の30年以上にわたる「日常的な民俗誌実践」の結果として実現したものであった。そして「強制連行を考える会」という市民団体の活動である「日常的な民俗誌実践」は、様々な教育現場にも広がっている。筆者に対して語られたTさんの語りは、これらの様々な「日常的な民俗誌実践」の中で長年にわたって築き上げられてきた物語であった。

これら既存の「日常的な民俗誌実践」に依拠したインタビューであったシーン1とシーン3に対し、シーン4のインタビューは、テレビディレクターと筆者によって創り出された新しい場であっ

た。ディレクターが案内してくれたのは、200人以上の死者を出した戦後の筑豊で最大の炭鉱事故で夫を亡くした遺族の女性たちが、事故後に集住させられた社宅街の一地区である。計画は、ここに暮らした経験のあるSさんにインタビューをするというものであった。ディレクターは事前に、ここに住む女性たちが炭鉱の爆発事故について話をしたがるという情報を得ていた。それにもかかわらず話してもよいと応じてくれたというSさんに話を聞くに当たり、ディレクターは筆者の研究課題に合わせて、「事故は、遺族の中でどう記憶されるのか、それは同じ境遇の人たちの間で共有されるのか、そして、外部の人にその記憶を話すのは苦痛なのか、そうではないのか」ということに焦点を当てることを提案していた。

筆者たちはSさんが以前住んでいた社宅の前で会い、インタビューを始めた。確かにSさんは話すことを拒みはしなかったが、事故時の状況や事故後この家に引っ越してきた経緯について尋ねると、詳細は話さず、「何が何やら、ごちゃごちゃなっちゃった」、「わからない」などと言った。この語りの上での混乱は、事故後遺族がいかに混乱した状況に置かれたかを伝えてくれる。だが、語りの型という観点からみると問題はそれだけではない。インタビューの後半で、事故について家族や友達と話すことはないかと尋ねると、Sさんは今まで事故について話したことは一度もないと答えた。Sさんがこの事故について伝える語りの型は、そもそも存在していなかったのである。彼女の口から生き生きと語られたのはむしろ、事故後の子育ての話であった。もしそのまま子育ての話聞きつづければ、私たちはSさんの豊かな語りを聞くことができたかもしれない。しかし、テレビカメラを前にしてSさんにそれ以上「調査課題」と直接にかかわりのないことを聞き続けることははばかれた。筆者、ディレクター、Sさんの三者の会話はかみ合わないまま、インタビューは終わってしまった。Sさんへのインタビューにおいて、筆者が頼るべき既存の「日常的な民俗誌実践」は存在していなかった。このため、筆者とディレクターは「炭鉱の記憶を語る」という的はずれな関心を、それを語り継ぎなどしてこなかったSさんに向けてることになってしまった。あまりにも短く不十分なインタビューではあったが、そこにはちぐはぐながら、「炭鉱を語り継ぐ」というテーマをめぐる全く新しい語りの場が生まれた。

番組では、Sさんへのインタビューの場面の後に、筆者が筑豊の住宅街を歩く映像と共に、次のようなナレーションが流れる。「地の底で絶たれた命。心の奥に封じ込まれたまま、消えていく記憶があります」。そして最後に、炭鉱を語り継ぐ人も、語り継がない人もいるということを知らなければならないと話す筆者の姿が映し出される。実際にはディレクターもインタビュアーの役割を果たしていたとはいえ、この番組においては、筆者こそがインタビューの実践者として、筑豊に住み着き筑豊を歩いて炭鉱の「記憶」を探し求める民俗誌的实践者として、描かれた。こうしてこの小さな物語を通してみると、筆者の行っている活動自体が、消えゆく炭鉱の「記憶」を「記録」しようとする、筑豊で繰り返されてきた実践の、若くて新しいもう一つの型になっているように感じられてくる。

以上で見てきたように、この番組制作の過程は、筑豊地域内の「日常的な民俗誌実践」、現在の日本に存在する炭鉱の記憶の語り継ぎへの関心と、筆者の研究的関心が相互に絡まり合いながら、炭鉱についての語りが生じた場であった。ここで筆者は、既存の「日常的な民俗誌実践」の後ろ盾に支えられ、時にそれを塗り替えながら、民俗誌的实践を行う主体として浮かび上がらせられることとなった。そして、ここでもまた、消えゆく炭鉱の「記憶」を「記録」することというテーマが繰り返されるのである。

## 4. 結論

テレビ番組の取材は極端な例ではあるが、日々、筆者の炭鉱をめぐる語りの調査は、炭鉱の「記憶」を残さなければならないと考える人々の意識を媒介として生じている。そして、筆者の行う一つ一つのインタビューも、炭鉱の痕跡が消えようとしている今、何とかその「記憶」をとどめよう、語り継ごうとする実践の中に取り込まれていく。

本論は、旧産炭地筑豊において、現地の人たちこそが実践しているように感じられた民俗学的な実践を、シュミット＝ラウバーの議論に依拠しながら「日常的な民俗誌実践」としてとらえるところから出発した。筆者の語り研究のためのデータ収集には、この「日常的な民俗誌実践」の後ろ盾が欠かせないのである。本論の議論を踏まえ、最初に提示した二つの問いに答えることで本論のまとめとした。

第一の問いは、「日常的な民俗誌実践」はどのような社会状況の中で生まれ、どのような目的を持ち、またどのようなフィールドワークやインタビューの文化を生み出しているのかというものであった。筑豊においては、炭鉱の閉山期以降、炭鉱は「負の遺産」とみなされ、一刻も早くその痕跡を消し去るべきものとされてきた。しかし、その中でこそ、消えゆく炭鉱の「記憶」を「記録」しようとする一部の市民の実践が生まれ、今日まで脈々と続いてきたのである。特に、炭鉱に生きた人々の自伝的な「記憶」を残そうとする人々が、「日常的な民俗誌実践」の主体となる傾向にあった。彼らは現地を歩き回るフィールドワークや、炭鉱の時代を直接知る人々へのインタビュー、写真や絵などのような彼らの「記憶」を物語る資料の収集を行った。最近になって「世界の記憶」に登録された山本作兵衛も、そのような市民の実践の中で注目を集めてきた人物であり、「日常的な民俗誌実践」に呼応しながら多くの絵を描きためてきたのである。

また、2000年代後半に始まった世界遺産登録に向けた活動によって、再び「日常的な民俗誌実践」が活性化された。この取り組みの過程で、筑豊には文化遺産となり得る遺跡が決定的に不足していることが明らかになる。一方でこの代わりに山本作兵衛が「世界の記憶」に登録されたことは、筑豊に貴重な歴史と「記憶」が存在すること、そしてその「記憶」を残すことの意義を地域住民に知らしめた。世界遺産登録に向けた取り組みの過程で、炭鉱の痕跡が消えゆく中で炭鉱の「記憶」を残さねばならないという意識が、改めて生まれるのである。この思考法は、閉山期以降自らの生き方として「日常的な民俗誌実践」を行ってきた人々の意識と重なるものがある。まち歩きイベントに代表されるように、世界遺産をめぐる過程の中で、筑豊の歴史への負のイメージが和らぎ、筑豊に住むより幅広い市民が「日常的な民俗誌実践」に参入するようになった。そして、この新しい「日常的な民俗誌実践」も、閉山期以降繰り返されてきた「日常的な民俗誌実践」の土台の上に花開いている。

また、本論で掲げた第二の問いは、筆者自身の調査がこの「日常的な民俗誌実践」との関係でいかに成立しているかというものであった。テレビ番組の事例で見た通り、研究者である筆者のインタビューは地元の人々の（時にはマスメディアの）支えの下にはじめて成立している。そして、住民の「日常的な民俗誌実践」に支えられ、時には新たな語りの場を生み出しながら、筆者自身が地域内に存在する民俗誌実践の新しい主体になっていっている。

さらには、地域住民の「日常的な民俗誌実践」も、それに巻き込まれていく筆者の民俗誌的調査も、炭鉱が「遺産」化され、炭鉱労働者の人生が「記憶」化されていくこの時代と共にある。筑豊において「日常的な民俗誌実践」は、炭鉱を「記憶」し、「記録」しようとする市民による実践と常に絡み合いながら実践されてきたのだ。

今日、記憶の継承という問題は、戦争体験や世界でのカタストロフィックな事件などにおいて社会的な関心事となっている。特に、体験者がなくなった時、その体験をいかに継承するかということが大きな課題となっている。民俗学は、民俗誌的な方法と認識論を問い続け、地域住民のコミュニケーションのスタイルに敏感に溶け込みながら話を聞くことを得意としてきた。今、民俗学者に求められているのは、体験者の話を聞いてきた地域住民が作り上げてきた「日常的な民俗誌実践」の在り方それ自体を学んで、それによって記憶を引き継ぐことではないだろうか。今後は、語りや紙の上での記録に留まらない様々な記憶の継承方法についても考慮に入れ、ドイツにおいて進展している文化的・社会的記憶をめぐる議論とドイツ民俗学の関係を学びながら、考えを深めていきたい。

## 注

- 1 本稿は、Johannes Moser (Ed.) 2018, *Themen und Tendenzen der deutschen und japanischen Volkskunde im Austausch: Münchener Beiträge zur Volkskunde*, vol. 46, に掲載された拙稿, "The Study of Narrative and "Everyday Ethnographic Practices": Heritage and Memory in Chikuhō, a Former Coal Mining Area in Japan" の日本語訳である。これは、2016年10月28日に開催された日独民俗学会共催国際シンポジウム "Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany" 「ドイツと日本における民俗学の視点と位相」において, "Heritage, Memory, and "Everyday Ethnographic Practices" in Chikuhō, a Former Coal Mining Area in Japan" として行ったポスター発表を論文化したものである。今回の再掲載に当たり、表現等を多少改めた。ただし、本稿で論じられるフィールドにおける事実や人々の語りと、これらに対する解釈は、本稿を執筆した2016年時点で筆者が把握していた範囲内でのものである。
- 2 金賢貞は、文化人類学者全京秀の議論 [全 1990 : 137-138] を引用しながら、ethnographyの訳語として「民族誌」ではなく「民俗誌」の表記を用いるとする。これは、民俗学と人類学を区別しようとするためではない。金は、その理由を、「[民族]を対象にするという誤解からより自由になれるだけでなく、究極的には[人]を理解するために[文化]を『記述』するという意図を『民俗誌』のほうがよりよく表すという全の主張に同意するからである」と述べる [金 2016 : 15]。本論も、全と金の主張によりながら、ethnographyの訳語として「民俗誌」という表記を採用する。
- 3 以下、本節における筑豊の歴史についての記述は、永末 [1973]、長弘 [2012] を参考にしながら、筆者が調査の過程で繰り返し聞いた知識にも基づいて再構成している。
- 4 この経過をまとめるに当たり、「明治日本の産業革命遺産」ホームページも参照した [明治日本の産業革命遺産 online : 「世界遺産登録までの道のり」]。
- 5 以下、坑夫の像をめぐる物語については、筆者が調査中現地の人々から聞いた話に加えて、『郷土直方 : 坑夫像を考える特別号』 [直方郷土研究会編 1997] の記述を参考に執筆した。

## 参考文献

- 安藤龍生 2010a 「世界文化遺産登録の取り組みから学んだこと、考えたこと」『田川市石炭・歴史博物館だより』 7。
- 安藤龍生 2010b 「世界文化遺産登録への取り組み～経過と意義～」『田川市石炭・歴史博物館館報』 3。
- 安藤龍生 2012 「『世界記憶遺産・山本作兵衛コレクション』と今後の山本研究への試論」『田川市石炭・歴史博物館館報』 5。
- 有馬学 2014 「消滅した〈近代〉と記憶遺産：いま、作兵衛画の何を問題にすべきか」有馬学、マイケル・ピアソン、福本寛、田中直樹、菊畑茂久馬編著『山本作兵衛と日本の近代』弦書房。

- 五木寛之 2004『青春の門：筑豊篇(上・下)』講談社。
- 井手川泰子 1984『火を産んだ母たち：女坑夫からの聞き書』葦書房。
- 上野朱 2012「世界を掘り抜け」『リベラシオン・人権研究ふくおか』146。
- 上野英信 1960『追われゆく坑夫たち』岩波書店。
- エドモンドソン、レイ 2002『ユネスコ「世界の記憶」：記録遺産保護のための一般指針(2002年改定版)』ユネスコ(国際連合教育科学文化機関) 情報社会部、文部科学省HP [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/other/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/02/13/1354665\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/02/13/1354665_01.pdf) (2018年12月2日閲覧)。
- 及川祥平 2014「ハンブルク大学民俗学／文化人類学研究所における民俗学教育について」『常民文化』37。
- 菊畑茂久馬 1994「川筋画狂人・山本作兵衛」『絵画の幻郷：菊畑茂久馬著作集3』海鳥社。
- 金賢貞 2016「韓国民俗学は『当たり前』を捉えうるか：韓国国立民俗博物館の二つの民俗誌(2007～14年)を中心に」『日常と文化』2。
- 木村至聖 2014『産業遺産の記憶と表象：「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学学術出版会。
- 國友宏俊 2009「我が国石炭政策の歴史と現状」経済産業省資源エネルギー庁 [http://www.enecho.meti.go.jp/category/resources\\_and\\_fuel/coal/japan/pdf/23.pdf](http://www.enecho.meti.go.jp/category/resources_and_fuel/coal/japan/pdf/23.pdf) (2018年2月16日閲覧)。
- Schmidt-Lauber, Brigitta 2012 "Seeing, Hearing, Feeling, Writing: Approaches and Methods from the Perspective of Ethnological Analysis of the Present", in Regina F. Bendix, and Galit Hasan-Rokem(eds.), *A Companion to Folklore*, Wiley-Blackwell.
- 田川郷土研究会 1965「会報：炭鉱資料収集運動」『郷土田川』24。
- 田川市石炭・歴史博物館・田川市美術館編 2008『二本煙突築豊百年／田川市石炭・歴史博物館開館二十五周年記念 特別企画：炭坑(ヤマ)の語り部 山本作兵衛の世界 584の物語』田川市石炭・歴史博物館、田川市美術館。
- 筑豊石炭産業史年表編纂委員会編 1973『筑豊石炭産業史年表』西日本文化協会。
- 全京秀 1990「물상화된 문화와 문화비평의 민속지론: 민속지의 실질을 위한 서곡 (物象化した文化と文化批評の民俗誌論：民俗誌の実践のための序曲)」『현상과 인식(現象と認識)』14 (3)。
- 土門拳 1960『筑豊のこどもたち』パトリア書房。
- 同和教育副読本作成委員会 1998『同和教育副読本「かがやき」中学校用』福岡県教育委員会。
- 林えいだい 1981『強制連行・強制労働：筑豊朝鮮人坑夫の記録』現代史出版会。
- 永末十四雄 1973『筑豊：石炭の地域史』日本放送出版協会。
- 長弘雄次 2012『筑豊の石炭に生きた日々の記憶：筑豊炭田開発技術史論文選集』文字の花書房。
- 直方郷土研究会編 1997『郷土直方：坑夫像を考える特別号』。
- 明治大正炭坑絵巻刊行会編 1963『明治大正炭坑絵巻』明治大正炭坑絵巻刊行会。
- 森明子 2009「ドイツの民俗学と文化人類学」『国立民族学博物館研究報告』33 (3)。
- 森崎和江 1970『まっくら：女坑夫からの聞き書』現代思潮社。
- 森本弘行 2008「炭坑記録画と山本作兵衛」田川市石炭・歴史博物館、田川市美術館編『二本煙突築豊百年／田川市石炭・歴史博物館開館二十五周年記念 特別企画：炭坑(ヤマ)の語り部 山本作兵衛の世界 584の物語』田川市石炭・歴史博物館、田川市美術館。
- レーマン、アルブレヒト 2005『森のフォークロア：ドイツ人の自然観と森林文化』(識名章喜・大淵知直訳)法政大学出版局。
- レーマン、アルブレヒト 2010「意識分析：民俗学の方法」(及川祥平訳)『日本民俗学』263。
- 山本作兵衛氏の炭坑の記録画並びに記録文書の保存・活用等検討委員会、保存調査検討部会、活用調査検討部会、受入環境調査検討部会、記念式典検討部会 2012「山本作兵衛氏の炭坑の記録画並びに記録文書の保存・活用等に係る検討結果報告書」、田川市HP [http://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/y\\_sakubei/kiji003897/](http://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/y_sakubei/kiji003897/) (2018年12月2日閲覧)。

#### 【オンライン文献】

- 田川市「山本作兵衛氏、炭坑の記録画」<http://www.y-sakubei.com/> (2018年12月2日閲覧)。
- 福岡県企画・地域振興部調査統計課「人口移動調査 第1表 平成28年(2016)」<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/dataweb/2016-1hyou.html> (2016年8月18日閲覧)。
- 明治日本の産業革命遺産「世界遺産登録までの道のり」<http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/history/index.html> (2016年8月28日閲覧)。